

求められたところでできることを

くろやま やすひろ
黒山 泰弘

一般財団法人 都市技術センター道路河川部長

1952年、大阪府生まれ。大阪市立大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学研究科博士前期課程修了。大阪市役所入庁後、橋梁、地下街・駐車場などの地下構造物の設計施工などを担当。退職後、大阪地下街(株)を経て、(一財)都市技術センター勤務。また、関西の土木技術者で組織する任意団体 CVV に参画・活動。2011年度～2014年度まで近畿大学非常勤講師。2016年度より大阪市立大学非常勤講師。2011年～2014年まで土木学会誌編集委員として活動し、現在も再び、学会誌編集委員として活躍中。

インタビュー日：2016年10月6日

聞き手：澁谷容子、山崎康予、三嶋信広



行政マンの土木屋として

若手時代に没頭したことは？

1977年に大阪市に入庁し土木局土木部橋梁課に配属されました。高度経済成長期に長大橋がたくさん建設され、質的改良や維持管理の時代を迎える中で、業務や学会などでの勉強会を通して、さまざまな角度から橋を見ることで橋梁に魅了されていきました。このころは若手研究者と議論したり、共同で実施した調査研究成果を学会発表したりしていました。また、様々な人と議論する中で、維持管理の重要性を感じ、まだパソコンの少ない時代に橋梁維持管理データベースの構想を夢想したものです。しかし、行政というところは1つのことを突き詰めることはできません。また、当時の橋梁課には、同年代や少し上の世代がたくさんいたため、係長になる際に橋梁に

残ることができず、その後退職まで戻ることはありませんでした。

行政ならではの仕事は？

橋梁から離れ、地下街や駐車場などの地下構造物の設計施工などを担当しました。大阪で今後の地下街新設の可能性はほぼないと思います。当時、2つの地下街建設を担当できたことは非常に面白く、貴重な経験でした。また、その前に2年ほど「花の万博」の開催に併せて市で開催した「国際水都首長会議」という水・緑をテーマとする国際会議の事務局員をやりましたが、メール・パソコンが当たり前ではない時代にFAXなどで海外とやりとりするのは大変でした。このような経験も、行政ならではのではないでしょうか。その後、管理職になり建設現場から離れることになりました。構造物建設を担当した実務時代には土木学会などの学協会にも積極的に関与しま

したが今では懐かしい思い出です。

挫折しかけたことはありますか？

管理職となって以降は、異動も多くなり、街路・道路・河川事業などさまざまな業務を担当しました。また、2年ほど本庁勤務を命じられた際には、何をやればいいのか悩んだこともあり、なかなか自分のやりたいことができませんでした。なぜ自分が呼ばれたのか、何のためにしているのかわからなくなったこともあります。

ただ、今思えば、人をまとめる能力や円滑なコミュニケーションを図るための‘知恵’というものは、このころに身につけていったように思います。住民説明などでまとまらないものをまとめていく力というのは、教えてもらって身につくものではなく、経験で‘知恵’を吸収していく必要があると思います。

委員会からのメッセージ

黒山泰弘さんは、大阪市役所入庁後、橋梁部門を経て、2つの地下街建設を担当され、ご自身日々珍しいご経歴の持ち主です。現在は(一財)都市技術センターに勤務される傍ら、シビル・ベテランズ&ボランティアズという任意団体で、地元根ざした活動を精力的に続けられています。とにかく明るくお話好きであり、幅広く活動を続けて来られているパワーの根源を探るべく、お話を伺わせていただきました。

土木回帰

土木回帰のきっかけを教えてください。

定年が見えてきた頃、やはり自分は土木で生きていこうという思いが芽生えました。今は、一生土木に携わっていきたいと思っています。そのきっかけは、土木学会誌の学会誌編集委員という仕事を知ったことでした。土木学会誌の「土木人の趣味」という企画のインタビューを受ける機会があり、そこから、編集委員という仕事を知り、わくわくしました。退職を機に応募してみたところ、みごと、編集委員になることができました。2011年から3年間編集委員を務め、いろいろな人とのつながりができました。人とつながることで、現在の自分の活動の幅もひろがり、そこでのご縁も多に役立っています。新たな人のつながりを得て土木の面白さを再発見しています。これからも、土木にこだわった活動をしていきたいと思っています。

現在の活動を教えてください。

退職を迎える頃、もう一つ声をかけてもらったものがあります。それがCVV(シビル・ベテランズ&ボランティアズ; Civil Veterans & Volunteers)です。CVVは土木学会関西支部FCC(フォーラム・シビル・ commons)の構想により誕生した任意団体で、土木事業に対して、中立的な立場から情報提供や助言を行い社会基盤整備に貢献しようとするものです。自治体のイベントの手伝いや子供たち向けのイベントの開催などを行ってしてきました。しかし、退職された方が中心なので、世代交代が必要だったころ、私に幹部としてCVVを引っ張ってもらえないかという誘いがあ

りました。これまでは皆、手弁当だったので、できるイベントや企画にも限りがありましたが、今年度は土木学会関西支部の共同研究グループとして活動することで、予算を獲得出来、船での橋梁見学会を実現できそうです。行政時代に培った調整力や知恵が多少なりとも生かされていると感じます。一つの専門を突き詰めた土木屋ではありませんが、まわりを見渡し調整することで、活動のお役にたてばと思っています。

やれること・やりたいことをやる

現在の楽しみは何ですか？

退職後、橋梁と再び向き合うことができました。きっかけは市電建設時代の橋梁図面との出会いです。大正・昭和初期に書かれた大変美しい図面です。現在、市橋梁OBを中心に大学の先生方や橋梁メーカーの方々にも加わっていただいた研究会を立ち上げ、市電時代の橋の図面をもとに、都市計画、事業採算性、設計手法、図面の書き方、橋梁景観など、様々な角度から勉強しています。市電時代の橋梁図面から、土木の歴史というものにさらに興味をもち、これから数年は楽しめそうな材料を見つけました。調査研究成果を土木史研究会へ発表することが当面の目標です。まだ元気なので土木に関わってもう少しいろいろなことに首を突っ込んでいきたいと思っています。

現役世代にアドバイスをお願いします。

現在の土木は私たちが学んだ頃に比べて、計画や環境などソフトな分野が増えるとともに、かなり細分化されています。学生には、社会に出てから学べるものはさておいて、基礎をしっかりと勉強して欲しいと思います。でも、最先端の技術や研究に触れ魅力を感じることは大切なので、そのバランスは難しいかもしれません。また、現役の方にとりよりはすべての方にですが、海外にどんどん出て、海外の美しい街をみて、日本の道路景観や街並みを素敵なものにしようと思ってもらえるとうれしいですね。

シニア側に発信してほしい

次期シニア層にひとことお願いします。

行政マンだけかもしれませんが、今は、倫理規定などで縛られ、私たちの時代と比較して、異分野交流が難しくなっています。でも、それでは幅広い視野を持つことができなのではないでしょうか。現役世代は頑張っていると思いますし、シニア側から口を出すと萎縮してしまうと思うので、現役側からシニア層にできること、してもらいたいことなどを発信してもらえると、シビルエンジニアとしては大変うれしいです。また、シニア層が現役世代と同じラインに入って、技能の習得や知恵を伝えていく機会があればよいとも感じています。

(文責:澁谷容子)

インタビューを終えて(聞き手から)

黒山泰弘さんとは、土木学会誌編集委員会で一緒させていただき、土木のことだけでなく、山登りも教えていただいたというご縁がありました。根っからのアクティブさと、人柄の良さから、現在も様々な活動をされていて、まだまだ若々しく感じました。普段心に秘めている思いもお伺いすることができ、楽しくインタビューすることができました。